日本語版心の理論質問紙の作成

[1, 2] 森口佑介, [3,4] 大神田麻子, [5] 篠原郁子, [2, 6] 鹿子木康弘, [3,7] 奥村優子, [1] 石橋美香子, [7] 板倉昭二
[1] 上越教育大学, [2] 科学技術振興機構, [3] 日本学術振興会,
[4] 神戸大学, [5] 愛知淑徳大学, [6] 東京大学, [7] 京都大学

問題・目的

心の理論の研究が本格的に始まってから，30 年余りが経過した。発達心理学においては，サリー・アン課題やスマーティ課題などを用いて，幼児が 4 歳半程度で他者の誤った信念を理解することが示されてきた(e.g., Wellman et al, 2001)。現在は乳児期から幼児期にかけて心の理論がいかに発達していくかが検討されている(Frith & Frith, 2003)。その一つの到達点ともいえるバッテリーが Wellman & Liu (2004)によって報告され，改訂を加えながらも現在心の理論の発達指標としても用いられるようになっている。

心の理論発達バッテリーは子どもを直接の対象とするため，その妥当性は高いものである。一方で，他の認知機能との関連をみたい場合やより実践的に用いる場合は，子どもへの負担が高くなるという問題がある。そこで，心の理論の発達を，Wellman & Liu (2004)などを参考にしながら，質問紙によって指標化しようという試みがある。Tahiroglu et al. (2012)は，心の理論質問紙を作成し，行動課題のバッテリーの結果を用いて妥当性などを確認している。この質問紙は，自閉症児にも与えられ，定型発達児と自閉症児との間に有意な違いがあることも示されている。本研究では，この質問紙の日本語版を作成することを目的とした。

方法

参加者：2-6 歳の子どもをもつ養育者計 120 名。都市部と郊外部の養育者に質問紙が配布された。

質問紙の作成：英語版 Children’s Social Understanding Scale(CSRS)42 項目を忠実に日本語に翻訳し，文化的背景から意味が伝わりにくい部分だけ修正を施した。その後，日米バイリンガルの成人によってバックトランスレーションを実施し，原文の英語と比較検討し，翻訳の妥当性を確認した。

質問紙の配布：大学の乳幼児研究に参加する養育者や保育園に通う子どもの養育者に質問紙を配布した。質問紙の主旨を説明し，記入を求めた

結果および考察

現在データ収集は継続中であるが，120 人のデータを基に因子分析を実施した。その結果，5 つの因子が得られた。それぞれの因子は，「意図や感情の理解」，「自他の心の違い」，「他者の考えの理解」，「注意の共有」，「偽りの理解」などとラベリングされた。先行研究(Tahiroglu et al., 2012)では因子分析が施されていないため，直接の比較はできないが，全体的には類似した因子構造が得られた。ただし，データを追加すると大幅に結果が変わる可能性もある。